

phase 26

PARKER HOUSE ROLL ②

「録音再生機」なんて誰も持っていない時代、「S&G」のジャンルなんて語らなかつた。

前号で触れた「505」のアイデンティティが「浅川マキ」と彼女に縁のある人々というものであったとして、では同店のバックボーンは何なのだろう。「音楽好き」という自然なスタンスで構えている雰囲気は伝わるのだが、ライヴハウスと呼べるようになったからには、何か色はついていないのだろうか。ブルースか、ジャズか、シャンソンか。

店主の中島氏が、個人的に「これは良いな」と思った音楽は、中学の時に聴いた「サイモン&ガーファンクル」だった。「もうその頃は解散していたので、リアルタイムではないんだけどね。僕が高校1年生の時にベスト盤が出て、当時、夕方6時からやってたNHKラジオで、アルバム全曲紹介している番組があって、渋谷陽一がパーソナリティで、それを聴いて『素晴らしい』と思ってね。少ない小遣いをはたいて買に行っちゃったわけですよ。「S&G」を、アルバム全曲紹介とは異なる番組もあったものだが、「30何年前はみんな録音再生機なんて持っていないから(笑)。あってもオープンリールのテープレコーダー。買いましたけど(笑)」という時代のお話である。「サイモン&ガーファンクル」は何と聞けば良いのか。フォークか、それとも「サイモン&ガーファンクル」とか呼び方がないよね。「ホフ・ディラン」をフォークと呼んでも、それは「風に吹かれて(BLOWING IN THE WIND)」の頃はそう呼んでもいいやろし、神様みたいに言われてたけど、ミュージシャンは変わっていくものやからね。ただ、ルーツとしてブルースがあったり、トラディショナルなフォークがあったりはするんやろうけどね。「トラディショナルなフォーク」という言い方をされると非常に解り易い。長く音楽に接していれば、それだけ音楽を説明する方法が適切になる。しかも、身近な言葉を使って解り易く、「サイモン&ガーファンクル」はそれこそブルースやらロックやらレゲエやらゴスペルやら、色々取り入れ本人やから、僕がブルースを知ったのもゴスペルを知ったのも彼らのお陰やし。「ライ・クーダー」に匹敵する、素敵な人たちですよ。ミュージシャンには「ライ・クーダー」の方が評価は高いけど(笑)。

「生活の半分以上を音楽に費やしてる」って人は、やっぱり素敵な音を聴かせてくれますから。

リベラルな発言が続く、「ZOO BAR」での経歴、音楽のウの店を引き継いだ決意、では「来るものは拒まず」的な姿勢でライヴをフッキング(と称している)かどうが解らないが、をやるのだろうか。「これはちよつとお断りしよう」と思うことはないのだろうか？そこは上手くしたもので、本場のスプの素人がひよつこり現れてもイロハを知らない場合は、一応、ライヴハウスであるから「これだけのレンタルフィーをいただきますけど」と説明すれば、集客に自信のないものはそれだけで勝手に引いていく、このあたりは「ライヴハウスらしくない」ことが上手く機能しているという失礼だろうか。少なくとも「小屋」としてはメジャーな存在ではないことが、余計な仕事を減らしてくれているとも言えるべきか。いや、これも先が読めるのだろうか？

「学生時代に経営楽同好会にいて、40歳から50歳を過ぎて仕事しながら続けている人」と、現役の学生でこれから音楽をやっていくという人と、基本的に同じです。初めてライヴをしますという若い人も、ずつと続けているオッサンも、まあ、一掃かなと、同時にプロやセミプロでやっている人もいっぱいいて、やっぱりそういう人たちは対応は多少違ってくるんですけども、これはねえ、それぞれ「どう違うねん」と言われると解りづらいけど、「生活の半分以上

を音楽に費やしてるな」っていう人がいるじゃないですか。そういう人たちってのは、やっぱり素敵な音を聴かせてくれますから。これはもう現場に立つ人の感覚的、心情的なものだろう。少なくとも人を見てポツたくる。メジャーなミュージシャンの名前を商売に借るといような底の浅い話とは、当然この本質が違う。「いずれにせよ、ここでやりたい」という人が増えてきているっていうのは嬉しいね。常連の年齢は35歳以上が多いけど(笑)。特にジャズ系の人はいかかな。一番年上は「渋谷陽一」さん(ジャズピアノリスト・「おかあさん」といっしょ)への楽曲提供などでも有名。かな。大きいところは大きいところであるんやけど、「ちよつとスケジュール空いているから」的なね。「大阪でやるんやけど、前の日に入らなくてきひん？」という人も多い。「中島のところなら30〜40人で良いよね？」みたいなね(笑)。

現在、ライヴは平均で月に4〜5回、多い日で8回ほどになる。「土日が中心になるんやけれども、東京からのゲストやどうして平日しかできひん」という場合もありですけど、明日も弾き語りのお兄ちゃんやんが東京から来られますし。取材日が月曜日であつたから、火曜日である「KYOTO CLUB METRO」で聞いた。通常1000人のキャバでやる人が、一本身体めで、お客さんの近くでやっど(とこ)か」というスタンスに、何となく似ている。

山口富士夫のブライベート音源を聴きながら飲む、正しく注がれた、美しい泡のエビスビール。

彼の名前に拘泥するわけではないが、先の「泉谷しげる」が京都で初めてライヴを行った場所」という噂の真偽を聞いてみた。元を正せば、「ZOO BAR」がまだオープンする前、当時のオーナーの久場氏が円山野外音楽堂で「浅川マキ」「山下洋輔トリオ」「泉谷しげる」らのフッキングを行ったらしいが、この場所に彼が来たかどうかは今となっては解らない。が、実現していたとしても不思議ではない。

取材も落ち着いた頃、一枚のMDを中島氏はデッキに入れた。6年程前に山口富士夫がギターとドラムだけでライヴを行った時の音源だと言う。それも一週間くらい前に突然電話がかかってきて「ああ、いいですよ」という具合で決まったらしい。「今、弦が切れました(笑)」「これは弦の3本目が切れて、続行不可能になりましたね。太い弦を使ってるからテンションが高いことよりも、多分手入れが悪いから(笑)。しかも替えの弦を持ってきてないもんやから、偶然、富士夫ちゃんが来る前の週に来た人から預かりっぱなしのギターがあつて、それを使い始めて、今チューニングしてるところね。富士夫ちゃんのツレが今頃、弦を買いにいってると(笑)。でも他人のギターでも弾きこなすからね」という実況付きで聴かせてもらった。

「PARKER HOUSE ROLL」の名義になってからも、山口富士夫をはじめ、金子マリ、ことうゆうぞう、静澤(カルメン)マキら、ロックともブルースとも呼べないが、いっばしの面子がライヴを行っている。

「あ、取材になったんかな(笑)。僕はすっかり飲んでて、申し訳ない。一杯どうですか?」「ビールを一杯、御馳走になった。適切な高さに保たれた、実に細かい泡が美しいエビスビール。持ち上げると泡が一気にわき上がり、「コマ」のシャベルのような割れ方をします。泡が消えない、注ぎ方が正しい証だ。ビールが一番良い苦みが残る。美味いビールだった。「京都で3番目くらいには美味いビールを出してると思うんやけど(笑)」。山口富士夫の独自の音源を聴きながら、美味いビールを飲む。こんな幸せがあるだろうか。

それまで、中島氏が店に流していたのはあるシャンソンシンガーのアルバムだった。それも「越路吹雪」や「金子由香利」という、それこそスタンダードなシャンソンとは違う、シャンソンと言われなければ解らないような、柔ら



かい女性ヴォーカルであった。都雅都雅の広瀬氏が言っていた。「今のジャンソン歌手は『ひとくりにジャンソンと言わないで欲しい』という人が増えている」という言葉を思い出した。結局ね、世間で言われるジャンソンって言うのは例えば宝塚歌劇団出身の人とか、料理家の平野レミさんとか、おすぎだかピーコかおちよとよとやっていると、有閑マダムがお遊び的にやっていると印象が強いんやね。そういう風に捉えられたくないっていう、20代〜30代のシンガーは確かに多いですよ。ジャズバンドと一緒にやっていたりとか、もうジャンソンというかどうかは解らないですけど、違うスタイルでやるうとしていている人は多い。ジャンソンと言えは、確かにネットリと絡みつくような、情念的なイメージがある。これだけ立て続けに聞かされると、何となく「ジャンソンって、これから流行るの?」という気がしてこなくもない。

「何というか、みんな微妙にメジャーになりきれない」、みんなとは誰? 「同店の常連ミュージシャンの」全員(笑)。まあ本人たちにその気がないのかも知れないけど、渋谷さんなんて特に、ジャズの世界ではムチャクチャ有名なけど、誰もが知っている訳ではないし、その必要もないんやろうね。小沢健二が流行った頃、渋谷さんが彼の後ろでピアノを弾いており、彼とともに紅白歌合戦に出演する話を持ち上がった。ところが大晦日は「新宿ヒットイン」で浅川マキとライブの予定もある。結局浅川マキに「渋谷さん、NHKに出るの?」って聞かれて紅白を蹴ったらしい。

シーンとは所詮、時代の薄切りかもしれない。その勢いに流されず、音楽の底辺を支え続けている。

店名は「Parker House」から取ったものでもあり、同時に、もしくはそれ以上に同店の名代でもあるメニューの名前でもある。アメリカで出版されたパンのレシピ本の中に「パークハウス」という名があった。19世紀から20世紀初頭にかけて、ボストンにあった同名の小さなホテルの朝食に出されていたものらしい。レシピによるとバターの利いた柔らかいパンだそうだが、同店のものは小麦粉と塩・砂糖・イースト団だけのオリジナルで、噛み応えがある。パン生地もフリーントも自家製。ルックスはハンバーガーのような料理(言葉)がそれだ。飲食店であり、ライブハウスでもあり、ギャラリーでもある。壁に掛けられたシカゴからニューオーリンズ、アメリカ各地のブルースマンや、彼らを取りまく人々を写した写真は懇意にしている写真家・打田(マンヘイ)浩一氏のものだ。

「パークハウス」な店かもしれないけれど、利用客は界隈のビジネスマンが多く、よくある常連がいつもたむろしているような店ではない。そもそも、業種を問われれば迷わずに「飲食店」と答える。「自家製のピザとサンドイッチとカレーが美味しい」というサブタイトルで、ライブがない日はヒマな飲み屋ですわ(笑)。お客さんが音楽好きな人ということも特になくて、近所のビジネスマンの方が多い。ときどき京都在住でここでライブをやっている人が、ひよこり覗いてくれたりするくらいだ。

「最近の若者って、こういう話をしたくても、こめんなさい、知りません(笑)。京都のミュージックシーンと言われても、昔のことなら言えるけど」という感じ。結局、事情は解らないけど、メトロ口にあるという、何か育て上げるんや」とか、そういう意識込みは絶対あると思うんやね。例えばその店をステップにして誰かがメジャーになったとか、いわゆる『京都の音楽シーン』、じゃその『シーン』って何や。っていうと、漠然としたものを思い描いてるからね。何か、世の中、音楽は進歩してるけれども『全ての人に音楽が必要か?』っていうとそうでもないわけやし。クラブとか、若い人には必要不可欠なものかもしれないけど、閉塞した空間の中でのことやからね。『街全

体が』というわけじゃない、全共闘、学生運動と言ったって、全ての学生が戦ったわけじゃないからね。ほとんどの人はノンポリだったんだから。

シーンというのは、「時代の薄切り」なのではないだろうか、世の中全体の時間を薄くスライスにしたときに、その断面には何色が多いか。世代によっては、同時代を生きていることができなかつたからこそ、光り輝いて見える70年代の、大学生のマインドと力がほとぼりしていた時代も、戦っていた人を赤色とすれば、その当時を切り取ったノンポリの青色だったのかもしれない。その時代を生きていければ、光っているが故に、面積の少ない色が多く見える。そんなものなのかもしれない。

少々今までの同コーナーとは勝手が違う。ただ、こういう誠に穴場なところにくると、音楽をやっている人、続けている人が何と多いことかといつも以上に思うのだ。確かに、音楽は全ての人に不可欠なものではないかもしれない。だが中島氏は「京都在住の人」と限ったことではないかもしれないけど、プロでもないアマでもないっていう、微妙なポジションでやっていると人が結構いますやん? 世代を問わず、その人々をミュージックシーンの底辺とするなら、彼らがいるからこそ世の中、音楽が続いていくんちゃうかなと思うんですけどね」とも思っている。もちろん、氏が自らアピールすることは決してなくとも、その底辺を支えているのが、きつと同店のような存在なのだ。失礼を承知で言えば、同店は「ぎりぎりライブハウス」なのかもしれない。だが同店ほど立派に機材が揃っており、それでも定期的にライブを行っている飲食店も数多くある。それらの店々と底辺を支える存在に他ならず、この店は、その高い志の代表格としてあつて欲しいし、長く続いて欲しいと思うのだ。



PARKER HOUSE ROLL

京都市下京区烏丸通松原下ル東側
メンバーズゴルフビルB1
075-352-8042
12:00~14:00
18:00~翌1:00/日祝休
※ライブは不定期。要問い合わせ

政治で
わたしは
変われない。